

英語コーパス学会 Newsletter No. 75

Dec. 25, 2012

■会長:堀 正広

■事務局:〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-8 大阪大学大学院言語文化研究科 田畑 智司研究室気付

■TEL:06-6850-5866 ■郵便振替口座:00930-3-195373(英語コーパス学会)

■URL: <http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/> ■e-mail: jaecs.hq@gmail.com ■twitter: @JAECs2012

JAECs
Japan Association for English Corpus Studies

第 38 回大会報告

■概要

英語コーパス学会第 38 回大会は、9 月 29 日(土)と 30 日(日)の 2 日間にわたり大阪大学豊中キャンパスにて開催されました。前身の英語コーパス研究会時代の 4 年間を含めると、今年は当学会創設 20 年目の節目に当たります。そこで、堀正広会長(熊本学園大学)を中心に記念大会準備委員会が編成され、大会の企画が立案されました。その結果、英国より Lexical Priming の理論で著名な Michael Hoey 先生(Liverpool 大学)を招いて行う記念講演を核として、ワークショップ、研究発表、シンポジウムからなる大会プログラム案が策定されました。

大会両日の午前中に行われたワークショップは、BNC をより深く理解するために敢えてコンピュータ室を使わずに講習を行う、というコンセプトで企画されたものです。高橋薫先生(豊田工業高等専門学校)と園田勝英先生(北海道大学)のお二人に講師を努めていただきました。第一部「BNC を読む—機械を使わずしてコーパスの構造を理解する—」では高橋先生が、力作の分厚いハンドアウトをもとに、BNC を構成する標本テキストのマークアップやタグの構成、特徴を分類整理して解説されました。高橋先生には、例えば、話し言葉を収録した Spoken Component(口語英語サブコーパス)において、話者・対話参加者の性別、年齢層、社会階層、学歴、方言、母語などの社会言語学的情報や、会話テキストの文献情報がどの程度まで詳細に(また正確に)記述されているのか、そして具体的にどのようなタグが用いられているのか丁寧に説明をしていただきました。

二日目、第二部は園田先生に「XML 文書としての BNC の利用法」と題する講義をしていただきました。園田先生は、XML 文書としての BNC の真価を発揮させるために有益な処理系として、どのようなツールやサービスがあるかを紹介するとともに、XML 文書から分析対象とする言語項目や情報を引き出すためのプログラミング技術に

も言及されました。また、フロアからも、人文情報学研究所・東京大学情報学環の永崎研宣先生に高機能 XML エディタの<oXygen/>を、デモを交えて紹介していただきました。このように、XML マークアップが施されたテキストの処理方法に関して有益な情報交換が行われました。

1日目の大会は、まず堀正広会長による開会の挨拶に続き、開催校大阪大学の木村茂雄言語文化研究科長に挨拶いただきました。木村科長は、齊藤俊雄先生(大阪大学名誉教授)と今井光規先生(摂南大学学長)の中世英語韻文ロマンスのコンコードダンス編纂等に言及され、当学会と開催校との由縁についてユーモアを交えて語られました。続いて、瀬良晴子先生(兵庫県立大学)の司会のもと総会が行われ、会計の小島ますみ先生(岐阜市立女子短期大学)より、2011年度会計報告及び2012年度予算案が示され、いずれも承認されました。大会に出席されなかった会員の皆様には決算書と予算書を同封いたしますので、ご確認ください。次に、学会賞選考委員長の深谷輝彦先生(相山女学園大学)から学会賞および奨励賞の発表と選考理由の説明の後、下記のような結果が発表されました。

第 12 回英語コーパス学会賞

受賞者: Laurence Anthony 氏(早稲田大学)

受賞対象: *AntConc* をはじめとする一連のコーパスツールの開発と公開およびこれらの普及と啓蒙活動

第 12 回英語コーパス学会奨励賞

受賞者: 仁科恭徳氏(明治学院大学)

受賞対象: *Evaluative Meanings and Disciplinary Values: A Corpus-based Study of Adjective Patterns in Research Articles in Applied Linguistics and Business Studies*. LAP LAMBERT Academic Publishing, 2011.

研究発表は 2 室でのパラレルセッションとなりました。第 1 室 和泉絵美先生(京都外国語大学)

と第2室 浮網茂信先生（大阪大谷大学）の司会のもと、計5件の研究発表が行われました。その後、堀会長の司会で、Michael Hoey 先生による記念講演「Lexical priming and the properties of text」が行われました。Hoey 先生の一連の著作は特にコロケーション、ディスコース、テキスト分析に関心を持つ研究者にとっては必読書と言えます。今講演では、Lexical Priming 理論の基盤となっている認知心理学の概念「プライミング効果 (Priming Effect)」を手始めに、言語の習得・習熟、さらにはテキストの構成や文体的効果とプライミングがいかに密接に関わっているか、豊富な用例を挙げて分かりやすく刺激に富む議論を展開されました。Hoey 先生は、壇上にとどまらず、時にはフロアへ降りて、講堂の座席間の通路を動き回りながら、身振り手振りを加えてフロアの聴衆一人ひとりに語りかけるかのごとく熱弁を振るわれました。記念大会に相応しい、素晴らしい講演でした。（詳細は pp. 7-8 掲載の堀正広先生による報告記事をご参照下さい。）

大会1日目終了後の懇親会は、49名の出席がありました。藤原康弘先生（愛知教育大学）の司会のもと、会長の堀正広先生の挨拶、そして赤野一郎先生（京都外国語大学）の乾杯の発声で始まりました。Michael Hoey 先生にもご参加いただき、Hoey 先生は予想通りの引っ張りだことなりました。懇親会は Hoey 先生を囲んでの談話や、会員相互の情報交換などで大いに盛会となりましたが、一点大きな懸念材料が残りました。台風が本州方面に接近する予報が出ていたためです。翌日の夕方にかけて近畿地方に最接近する可能性が高いとのことで、日曜日のプログラムの実施の有無は翌朝7時にメーリングリストを通じて発表されることとなり、午後8時に懇親会を終了いたしました。

2日目は台風の進路を睨みながらの、やや不安なスタートとはなりましたが、初代会長の齊藤俊雄先生を会場にお迎えし、お元気そうなお顔を久しぶりに拝見できたことは大変嬉しいことでした。研究発表は初日と同様に2室に分かれて、大谷直輝先生（埼玉大学）と堀田秀吾先生（明治大学）の司会のもと、それぞれ2件ずつの研究発表が行われ活発な議論が交わされました。

あいにく、台風の進行が早まったために、2日目の午後に予定されていたシンポジウム「私のコーパス利用」（司会・進行：赤野一郎先生）を中止せざるを得なくなってしまうことは大変残念でした。しかし、このシンポジウムは2013年4月27日午後2時より、再び大阪大学豊中キャンパス

にて開催することになりました。会員の皆様のお越しをお待ちしております。第38回大会は2日間を通して、108名の参加者がありました〔会員80名+新入会員7名+当日会員21名〕。

最後に、会長の堀正広先生、本学会事務局（会計担当）の小島ますみ先生、大会役員の赤野一郎先生、石川保茂先生（京都外国語大学）、梅咲敦子先生（関西学院大学）、投野由紀夫先生（東京外国語大学）、西村秀夫先生（三重大学）、西村道信先生（大手前大学）のご尽力と細部にまで配慮の行き届いたご協力で今大会が盛会に終わったことを喜び、心よりお礼申し上げます。加えて大会実施に協力いただいた言語文化研究科の大学院生諸氏にもこの紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

■ 研究発表

二言語コンコーダンサー WebParaNews と AntPConc を利用した DDL 授業の実践

中條清美（日本大学）

西垣知佳子（千葉大学）

アントニ・ローレンス（早稲田大学）

内山将夫（情報通信研究機構）

本発表では、二言語検索サイト WebParaNews と検索ツール AntPConc を利用した Data-driven Learning (DDL) スタイルの英語授業実践の結果が報告された。

まず、従来の DDL の問題点として、英語コーパスだけの利用である場合、その内容や表現のレベルが高すぎると学習者が使いこなせないことがあること、検索ツールをスムーズに操作できるようになるまでに時間を要することなどが挙げられた。

そこで、これらの問題点を解消するべく、日英パラレルコーパスを使いやすいインターフェースで検索できる WebParaNews と AntPConc の利用が提案された。WebParaNews は、日英パラレルコーパス検索サイト AntWebConc-Parallel に日英新聞記事対応付けデータをコンパイルしたものである。AntPConc は、WebParaNews のスタンドアロン版として開発されたものである。これらはいずれも無償公開されている。

大学の学部レベルでの実践においては、上記ツールを用いて学生自らが *lawyer *ing* のような分詞による名詞の後置修飾の例や感嘆文で使われる *how* の例を検索し、それら表現の使われ方を学習した。また、大学院レベルでの実践においては、学校英語と新聞英語のギャップから語彙の知識を深める学習が行われた（例えば、*bear* と共起する語について、学校英語と新聞英語ではどのような

傾向の違いが見られるか、など)。このような DDL の導入の結果、いずれの実践においてもプリテストとポストテストの間に有意な差が見られ、その効果が証明された。学習者からも全般的に良い評価を得ているとのことであった。

最後に、DDL の中学・高校への導入が提案された。この二つのツールによってよりバリエーション豊かな使用例を容易に収集できることから、実例を多く盛り込んだ文法指導教材を作成する手助けとなるのではないかとのことであった。

質疑応答では、学生がどの程度日本語訳を参照しているかという質問があった。慣れるとあまり参照しなくなるが、初級レベルの学習者にとっては良い助けとなっているとのことである。また、DDL の効果をもう少し実験を通して検証してはどうか、実践後もう少し時間を置いた delayed ポストテストを行ってはどうか、といった提案もなされ、今後の DDL 普及に向けた高い可能性が感じられる発表となった。

和泉絵美 (京都外国語大学非常勤講師)

Advancing AntConc: Design and Performance Improvements for Multi-Language, Multiplatform Corpus Analysis by Researchers, Teachers, and Language Learners.

Laurence Anthony (Waseda University)

本発表では、コーパス分析で近年広く利用されている AntConc について、その最新バージョン (Version 3.3) における改良点が紹介された。

まず、AntConc を含む世界のコーパス分析ツールの特徴や利用状況の概観が行われた。WordSmith, COCA, BNCweb などが代表的なツールとして挙げられた。現在、AntConc は WordSmith と同じ約 20% のシェアを誇るとのことである。これらのツールに見られる問題点 (もしくは制限) として、その多くが有償であること、Windows 上でのみ利用可能なこと、研究者向けであり Data-driven Learning (DDL) などにおける学習者の利用に適さないこと、設定がブラックボックスであること、英語のみに対応していること、直感的な操作が難しいこと、などが挙げられた。

そこで、これらの問題点を解消すべく、AntConc に近年施されてきた改良点が紹介された。初期バージョンから一貫する利点としては、無償であること、Windows のみならず Mac や Linux 上でも利用可能なこと、ユーザが一から設定を行えること、ユーザフレンドリーなインターフェースであることなどが挙げられた。それに加え、近年のバージョンに施された改良点として、Unicode

対応であり、“token definition”メニューからユーザが検索において語として扱いたい文字をあらかじめ定義することにより、あらゆる言語のコーパスに対応可能であることが説明された。また、他の多くのツールではあいまいに定義されてきた空白の扱いについても、AntConc ではユーザが空白を検索対象とするのかしないのか、明確に設定できるとのことである。また、コンコードンスラインを更に見やすく整列させる機能などが加えられ、よりユーザフレンドリーなインターフェースになったことにより、学習者にもますます使いやすいツールへと改善されていることが示された。最後にデモが行われ、コンコードンスラインからジャンプした元テキストにおいて、品詞タグを表示/非表示にする機能などが紹介された。

発表後の議論では、カリキュラム・デザインに AntConc が利用された例が紹介され、研究だけでなく教育の現場における AntConc の利用可能性の広がりを感じさせた。

和泉絵美 (京都外国語大学非常勤講師)

The Design, Development and Purpose of the International Corpus of Crosslinguistic Interlanguage (ICCI)

Yukio Tono (Tokyo University of Foreign Studies)

本発表では、あらゆる国・地域の初～中級レベル英語学習者の作文データを収集することを目的に実施された “The International Corpus of Crosslinguistic Interlanguage (ICCI)” プロジェクトの完了が報告された。

まず、プロジェクトの目的と概要が紹介された。このプロジェクトでは、既存の学習者コーパスにおいてその収集が手薄である初～中級レベル (CEFR の Pre-A1 もしくは A1 レベル) かつ若年層の学習者データを収集することを目的とし、イスラエル・オーストリア・スペイン・台湾・中国・日本・ポーランド・香港の協力のもと行われた。完成したコーパスには、これらの国/地域における 9 千人の primary/secondary school の学習者の作文データ (のべ 844,400 語) が収録されている。これらの作文は、クラス内で 20 分の制限時間のもと、辞書を利用せずに書かれた。トピックとスタイルは、お金に関する argumentative essay および食べ物に関する narrative/descriptive essay などである。

次に、コーパス構築の手順と公開状況が報告された。収集された手書きの作文のコーパス化にあたっては、それらを PDF 化し、電子データとして書き起こした。作文に含まれる個人情報匿名化された。また、プレーンテキストだけでなく、品

詞タグが付与されたバージョンなど、複数のバージョンが準備されている。このコーパスの利用については、公開済みの専用検索サイトにおいてコーパス検索できるほか、テキストデータと学習者情報のメタデータをダウンロードすることもできる（要ユーザ登録）。

最後に、このコーパスの利用例として、機械学習を用いた基準特性 (criterial feature) の抽出実験が紹介された。基準特性とは、学習者による正・負の言語使用とその分布であり、それらを特定することにより学習者の英語力レベルを弁別できるとされている。ICCI のデータに含まれる言語特徴を素性として、機械学習による英語力レベル判別を行うと、判別が成功した際に重視された (判別に優先的に利用された) 言語特徴が明らかになる。それら言語特徴を、各英語力レベルを特徴づける基準特性として定義することができる。実験では、テキスト総語数のほか、動詞句の数、節・文などの平均長といった「流暢さ」を示す指標が有効とされたことが報告された。

質疑応答では、基準特性というどちらかという個別的な特徴と実際のコミュニケーションにおける学習者のパフォーマンス全体をどう関連づけるべきか、などに関する議論が行われ、学習者言語をいかに客観的に記述し、その知見を教育現場にどう活かすか、という問題に関する多くの示唆が得られた。

和泉絵美 (京都外国語大学非常勤講師)

派生における新語形成についての考察

一否定接頭辞付加派生語の場合一

岡田 晃 (大東文化大学非常勤講師)

本発表は否定接頭辞 *in-* と *un-* をとりあげ、母語話者の接辞選択の仕方を考察する。現代英語においてどちらの接辞もととり得るという「二重語」50語を選び、BNC, OED, MED による検証を試みる。

BNC の頻度数から次の点を指摘する。(1)各派生語とも *in-* か *un-* のどちらかに偏っている。(2)二重語の実用例が確認できるのは 6 語にすぎない (*advisable, definable, constant, sufferable, measurable, substantial*)。 (3) *in-* 付加派生語が圧倒的に多い (*in-* 16300 例, *un-* 6780 例)。ただし, *in-* が本来語に付く例は無い一方で, *un-* は外来語にも付加されることから, 母語話者には *un-* の方が自由で新語にも付加できるとの認識があると考えられる。さらに, *in-* は特別な理由がないかぎり新形容詞には付かないと推測する。

接尾辞による分類では, *-able/-ible* 付加派生語が最も多く 50 例中 21 例 (内 *in-* 12, *un-* 5) である

ことが示され, *-able* 形容詞には両接頭辞付加の可能性があることが示される。

次の点が結論である。(1) BNC の「二重語」の例では *in-* が多く, *in-/un-* 両用の例は 6 語にすぎない (OED では確認できるが)。(2)*-able* 語尾の形容詞には *in-/un-* 両用の可能性はあるが, *in-* の頻度が高い。(3)*un-* には偶発性と日常性の可能性があり, *in-* 派生語は一語として記憶されると考えられることから新形容詞にはまず *un-* の付加が前提となるのではないかと予測する。

最後に, 今後の課題として頻度の低い形容詞を選定し, どの否定接辞が付加されるのかを検証する必要性をあげた。

発表のあと, (1)「*un-* の偶発性」とその用例の出所との関係, (2) *in-* の高頻度は *formal* (2313), *credible* (1064), *possible* (6581) が支えており, 他の形容詞は「日常性」に欠けるのではないか, (3)「新形容詞の *un-* 付加が前提となる」ことの実証のための今後の方法論, (4) 否定の範囲, *immoral/unmoral* などの否定の強さの問題, *moral* 自体の考察の必要性, などが議論された。

浮網茂信 (大阪大谷大学)

性格の違いは使用される語にいかんにかかわるか —二人の福音派牧師の比較

石井昌子 (京都大学大学院生)

本発表では二人の福音派牧師—Edgar Tryan (G. Eliot, *Janet's Repentance*) と St. John (C. Brontë, *Jane Eyre*)—をとりあげ, 小説中の描写及び批評家の言説を基に Tryan の性格を他人の感情を共有できる能力としての *sympathy*, John の性格を自己の知識や権威への過信としての *arrogance* と仮定する。

コーパスによる検証には Gutenberg のテキストから抽出し OUP 書籍版と照合した人物ごとの言葉と AntConc を利用する。作者の文体差を考慮するため上記以外に各二人の主要人物も含め, 主格代名詞 *I, we, you* の使用頻度及びそれに続く *mental/modal verbs* を量的・質的に分析する。

Tryan に *I* の頻度が高く, *I* に続く *mental verbs* の頻度では二人に差がないことから, Tryan には自らの事実を語って相手と共感する傾向があること, *mental verbs* の使用では, *you* に続く頻度が Tryan に際立って高い (36.5%; 他の人物は 20~25% 程度) ことから, 相手の認識・感情・態度を重んじる彼の傾向を推察する。とくに *you* と共起して *emotion/attitude* を表すものが, 他の人物の文体傾向に反して Tryan に多く (26.1%; John 16.7%), 相手の感情・態度に配慮する Tryan の傾向を示す。 *you* と共起する認知動詞は両者でほぼ同じである

(Tryan 73.9%; John 76.9%) が, John には misinterpret, misunderstand, neglect など相手の認知能力を疑い非難する傾向がある一方, Tryan に見られるこの傾向の 1 例は相手を絶望的事実認識から救うための使用であることが示される。

you に続く義務・禁止の modal verbs は, 文体の差にかかわらず Tryan (4.8%) より John (8.3%) に多い上に, Tryan の具体例は相手を義務から解放する用法であると論じる。

最後に, 本分析が *Jane Eyre* の結末部の解釈の対立を解く一環になりうること, 今後の課題として Eliot の作品における sympathy 獲得の文体表現による検証があげられた。

発表のあと, (1) mental verbs (*think/know* など) と命題との関係, modal verbs の意味 (root/epistemic) の考察; (2) 人称代名詞と *of / the* などとの相反する頻度傾向を用いた検証の可能性; (3) 性格を見る他の指標として *let's* (+mental verbs), 呼びかけ語 (例: Tryan の *dear*+固有名詞), *one, people* などについて議論された。

浮網茂信 (大阪大谷大学)

英語接頭辞 *over-*の数量的分析

木山直毅 (大阪大学大学院生)

本発表は, 接頭辞 *over-*をともなう英語の動詞 (以下, *over-V*) を考察対象として, 従来は「空間的」用法と「過剰」用法に大別されてきた *over-V* の様々な用法に対して, (i) コーパスからのデータを用いて, 言語使用の実態に即した分類を行い, (ii) 拡張義である「過剰」用法の方が, 「空間的」用法よりも語が「豊か」になるのはなぜかという疑問の解明を試みるものである。

最初に, 先行研究の批判的な検討が行われた。まず, *over-V* の用法を「空間」と「過剰」に大別して分類する認知言語学に対しては, 分類の不備が指摘された。次に, 意味関数を用いて *over-V* を分析する語彙意味論が行った一般化に対しては, コーパス内の実例を用いて, 様々な反例が挙げられた。

発表者は, 先行研究が持つ問題を解決し, 言語使用に依拠したボトムアップの *over-V* のネットワークを構築するため, *over-V* のデータを BNC から抽出し, Collostructional analysis を用いて, 結びつきの強い *over-V* を選び出し, その目的語に対して WordNet を用いて意味的なタグ付けを行い, タグ付けされたデータに対してクラスタ分析を行った。

クラスタ分析の結果得られたデンドログラムは以下の点を示唆する。第一に, 「空間的」用法の目

的語には具体物と抽象物がともに現れるが, 「過剰」用法の目的語には抽象物しか現れない。第二に, 「力関係」を表す意味は, 「過剰」用法ではなく「空間的」用法に近い。第三に, 先行研究が指摘する「容器」と「尺度」の用法が厳密には区別できない。

発表に続く質疑応答では, 発表者の提示した *over-V* の分類に対して, (i) *V* の位置に入る動詞の分類となっていないか, (ii) 空間的意味と過剰の意味の関係性をどのように扱うのか, (iii) 「空間」をどのように定義するかによって, 結果の解釈が変わるのではないかという点が指摘された。

今回の発表では, 目的語の意味タイプだけに基づいて, *over-V* の分類を行ったが, それ以外の文法的・意味的・談話的特性を見ていくことで, 実際の言語使用をより忠実に反映した, *over-V* のネットワークの構築が可能になると思われる。

大谷直輝 (埼玉大学)

副動詞を含む移動構文と使役移動構文の類似点と相違点

森下裕三 (神戸大学大学院生)

本発表は, 副動詞移動構文 (eg. *She came running from the parlour*) と副動詞使役移動構文 (eg. *She sent the creature flying across the class-room*) という, 定形の動詞と非定形 (-ing 形) の動詞を含む二種類の構文の類似点と相違点を, コーパスにおける頻度に基づいて考察するものである。

副動詞移動構文とは, 定形の動詞の後に非定形の動詞が続く構文であり, 副動詞使役移動構文とは, 定形の動詞, 目的語句, 非定形の動詞が連続する構文である。両構文において, 非定形の動詞は取り除くことが可能である。また, 類型論的な観点から見ると, 両構文内の非定形の動詞は副動詞と見なせる。発表者は, 両構文を分析するために, BNC から全生起例を抽出し, 両構文内で使われる定形の動詞と副動詞の頻度を調査した。

調査結果から, 両構文の類似点と相違点が示された。類似点としては, 両構文に生起する頻度の高い副動詞に, *running, crashing, rushing* など共通するものが多いことが分かった。相違点として, 副動詞移動構文では, 定形の動詞が直示移動詞の場合は副動詞に移動様態動詞が続く傾向があるが, 定形の動詞が移動様態動詞の場合は副動詞に活動動詞が続く傾向がある点が示された。一方, 副動詞使役移動構文の場合, 定形の動詞が開始型であるか継続型であるかによって, 後続する副動詞が移動様態動詞になるか活動動詞になるかの傾向が分かれた。

次に、発表者は、この調査結果に対して質的な分析を行うことで、(i) 副動詞の位置に現れる動詞に激しい動作を表す移動様態動詞が多い点や、(ii) 定形の動詞と副動詞の組み合わせに特定の傾向が見られる点の説明を試みた。

質疑応答では、BNC からのデータの抽出方法に関する質問がなされ、発表者がデータ作成のため、BNC から手作業で根気よくデータを収集している事実が明らかになった。副動詞の研究は、これまで主に作例と内観によって質的に分析がなされてきたが、本発表では、コーパスを用いて定量的な分析を行い、得られた結果に対して、認知的な観点から説明を試みた点で、実証的な理論研究と言える。

大谷直輝 (埼玉大学)

コーパスを活用したシノニム研究—英和辞典の記述改善に向けて—

島田祥吾(広島大学大学院生)

語法研究としてのコーパスの活用は比較的良好に見られるものの、シノニム研究への応用を試みたのが本発表であり、その主な研究目的は、類義語とされる表現の使用態様をコーパスを用いて検討することによって、既存の英和辞典や英英辞典におけるシノニムに関する記述の不十分さを明らかにし、英和辞典の記述改善に向けた提言をすることにあつた。

実際の発表では、小西(1976)によるシノニムの定義を土台に、数あるシノニムの中でも、特に接尾辞 *-ly* を持つ副詞に焦点を当てて分析を行った。具体的には、*drastically* と *radically* を例として取り上げ、市販の 8 種類の英和辞典、6 種類の英英辞典におけるそれぞれの語に関する記述を引用し、比較検討した。上で、WordBanksOnline を利用して、両語のコロケーションを調査した。*t*-score を利用して *drastically* と *radically* と共起する上位 50 の表現を比較したところ、*change* や *alter* のように両語に共通してよく共起する動詞が観察される反面、*drastically* の場合には *reduce* や *cut* のようなマイナス方向への変化を表す動詞と共起することが *radically* との顕著な差異として観察された。さらに、MI-score をもとに比較してみると、*t*-score をもとにした検討では明らかにならなかった共起関係が明らかになった。それらを大まかに分類すると、「①変化を否定的に捉える動詞」「②変化を中立的に捉える動詞」「③変化を肯定的に捉える動詞」があり、*drastically* は①、*radically* は③と共起しやすいことが観察された。

このコーパスを使った調査結果をもとに辞書の

記述を再度検討してみると、辞書の記述からはこれらの副詞の特性を把握する上での有益な記述はえられないため、たとえば本発表で扱った *drastically* と *radically* であれば、「(否定的に)」「(中立的に)」「(肯定的に)」などの分類ごとに共起関係が頻繁に見られる語を例として、*drastically* であれば「(否定的に)大幅に、劇的に(減らすなど)」のように記述するべきだと提案した。

質疑応答としては、その記述方法および記述内容の適切性に関する部分で多くの質問やコメントが述べられ、今後の研究の展開についての課題が明らかになった。

堀田秀吾 (明治大学)

高汎用性コーパスシステムを用いた英語教育および学習支援に関する研究

藤野玄大(東北学院大学大学院生)

岡田 毅(東北大学)

坂本泰伸(東北学院大学)

教育者や学習者がより利用しやすいシステムを開発するにあたって、既存のコーパスを利用した学習法ではデータソースの共有や新たな属性情報を登録するのに大きな努力を必要とする場合があつた。そういった問題意識のもと、教育への応用を睨みながら、使いやすく、汎用性の高いコーパス解析システムを提案するというのが本発表の目的であつた。

実際の英語学習では、一般的に、英文内の教員や学習者が大事だと思ふ箇所や表現の出現位置も重要となる。本発表で提案されたシステムでは、まず、英文書を構成する単語にそれぞれ数値の形で位置情報 *Word_seq* として付与し、同時に各単語 (スペル) に *Word ID* (同一単語は同じ *Word ID* になる) を付与する。そして、それらの情報を組み合わせることで英文書を管理する形式を採用している。より具体的に例を言えば、文書の始まりから最後まで、各単語に 1 から始まる数字を順番に *ID* として付与して行き、文書の構造を管理する。

さらに、このシステムでは、これらに独自の属性情報を追加で関連付けることができる。加えて、レマ、コロケーション、反意語のように利用者ごとにことなる語彙集もテーブルを利用することで、学習者自身のポートフォリオ的に学習情報を管理ができる。また、これらの情報を、「教師対学習者」「学習者同士」「教師同士」で共有することも簡便にできるため、同じシステムを利用している学習者の進捗や理解度なども把握でき、柔

軟な学習指導や相互学習が可能になる。また、本システムは、英文書の語彙密度、タイプ・トークン比率、読みやすさの計算が可能で、これにより教材の難易度を定量的に評価し、学習者のレベルに応じた適切な教材選びが可能になるなど、このシステムを利用することで多くの利点が期待できることが示された。

質疑応答では、特に数字による管理方法についての質問、技術的な質問等、非常に活発な議論が交わされた。

堀田秀吾 (明治大学)

■ 記念講演

Lexical priming and the properties of text

Michael Hoey (University of Liverpool, UK)

今年当学会の前身である「英語コーパス研究会」が設立されて20年目に当たる。本講演はこれを記念した記念講演である。招待講師として、*Lexical Priming: A new theory of words and language* (Routledge, 2005)等で著名な、英国を代表する言語学者の一人である、リバプール大学の Michael Hoey 教授をお招きした。講演は終始和やかな雰囲気で行われ、Hoey 教授のユーモアとエネルギー溢るボディアクションに会場は、たびたび笑いの渦に包まれた。

講演は、コーパス研究における lexical priming (以下、「語彙的プライミング」とする)理論の援用であった。プライミングとは、心理学の用語で、「先行する事柄が後続する事柄に影響を与える状況」を意味する。Hoey 教授は、これを言語学に応用した。Hoey 教授によると、単語はすべて、心(あるいは記憶)の中である特定の単語、文法、意味、語用などと密接な関わりがあり、言語を習得する過程において、ある語がどのような語と一緒に使われ、どのような意味的、文法的な、そして語用論的な環境で使われるかは、言語の習得の段階で、あらかじめ訓練され、刷り込まれる、という。これをプライムされているという。したがって、Hoey 教授の語彙的プライミング理論においては、語と語の習慣的な結びつきである collocation を説明することが最も重要な言語学上の問題として扱われる。

講演では、コーパスを使って得られた具体的な例を提示しながら、まず語彙的プライミング理論について説明され、次にテキストの重要な3つの特性をプライミングの視点から分析された。その3つの特性とは、1つ目は、語と語の結束性について、2つ目は、テキストと語彙の意味的な関係について、3つ目は、語と文の書き出しや段落との

関係についてである。

講演ではまず主張が提示され、次にコーパスを使って例証され、語彙的プライミング理論を展開された。本報告では、立証された主張を示し、豊富な例から代表的な例を1, 2例挙げながら説明していきたい。

1 「ある単語と出会うと我々は必ず無意識のうちに次のことに気づく。」

(1) 「どのような語と共起するか。」

(collocations)

たとえば、*word* は *against* と共起することが多い。(e.g. *your word against mine*)

(2) 「どのような意味の連想があるか。」

(semantic associations)

たとえば、*a word against* は「情報を送ったり、受け取ったりすること」の意味的連想がある。

(3) 「どのような語用論的な特徴があるか。」

(pragmatic associations)

たとえば、*a word against* は否定や拒否の語用論的な連想がある。(e.g. *wouldn't bear a word against*)

2 「ある単語と出会うと我々は必ず無意識のうちに次のことに気づく。」

(1) 「その語はどのような文法的パターンと関わりがあるか。」(colligations)

たとえば、*consequence* は「不定の」文法的パターン (*another consequence, one consequence, a consequence*) を持つが、*result* は「限定的な」文法的パターン (*this result, the result*) を持つ。

(2) 「ある特定の性別・文体・社会的状況で使われる。」

たとえば、「否定+情報のやりとり」で使われる *a word against* は口語的な英語で使われることが多い。

3 「ある単語と出会うと我々は必ず無意識のうちに次のことに気づく。」

(1) 「その単語はテキストの中で典型的な結合の仕方をしているか。」(textual collocations)

たとえば、「否定+情報のやりとり」で使われる *a word against* は、テキストの中で結束性を持たない。つまり、*word* という語が繰り返され、情報に関する動詞が継続的に使われることはない。一方、Charles Dickens の *Pictures From Italy* から引用された文章においては、*ruin* は「絵画のような歴史的建造物としての遺跡」という意味と「修復不可能な状態に荒廃している」の2つの意味で用いられている。「遺跡」の意味の *ruin* はテキストの中では結束性を持つ

が、「荒廃している」の意味で使われている *ruin* は結束性を持たない。Dickens は、この2つの意味の *ruin* をうまく1つに融合させて、「荒廃」を意味する *ruin* のプライムされた使い方を覆している。

(2)「その単語は特定のテキストとの関係を連想させるか。」(textual semantic associations)

たとえば、「否定+情報のやりとり」で使われる *a word against* は、誰かが非難されたか、あるいは非難されそうになる文脈で使われる。

Sixty years ago today Pluto was discovered, now the hunt is on for an elusive tenth planet.

上記の例文において、*sixty, years, ago* は用例の半数以上が対照関係を表す文の中で使われている。また、*today* も文をまたいで対照関係を述べる文章の中で使われる。さらに、*sixty* は、*almost sixty, nearly sixty, between sixty and seventy, roughly sixty, around sixty, sixty or so, up to sixty, over sixty* のように「曖昧さ」と語用論的連想が強くプライムされている。

(3)「その単語が起こるテキストでの位置はどうか。たとえば、文頭に起こるか、段落の始めに起こるか。」

新聞記事を第1段落の第1番目の文、第2段落の第1番目の文、それ以外の文と分けて調査してみると、第1段落の第1番目の文は他の文と比べいくつかの点で特徴がある。その一つは、第1段落の最初の文に圧倒的に多く現れる次のクラスターである。*according to, last night after, it emerged yesterday, was last night, are to be.*

以上が、Hoey 教授の講演の概略である。関心のある方は当日の講演のスライドが公開されているのでご覧ください。

講演当日は、翌日の台風の来襲を予感しながら、聴衆は新しい言語観としての lexical priming の学問の台風に吹かれ、知的好奇心を大いに揺さぶられた。

堀正広 (熊本学園大学)

シンポジウム「私のコーパス利用」開催について

第38回大会では台風のため中止となったシンポジウム「私のコーパス利用」を平成25年4月27日(土)14:00-17:00 大阪大学豊中キャンパスで開催致します。詳細は後日メーリングリストならびに学会ウェブサイトに記載致します。多くの会員のご参加をお待ちしております。

第39回大会研究発表者募集

英語コーパス学会第39回大会は、2013年10月5日(土)および6日(日)の2日間、東北大学川内北キャンパス(〒980-8576 仙台市青葉区川内41; <http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/about/10/about1003/index.html/>)で開催される運びとなりました。発表を希望される方は、下記の要領に従って e-mail で事務局宛に奮ってご応募ください。

【分野】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。

【応募資格】本学会員であること。

【発表方法】発表20分、質疑10分。

【応募方法】冒頭に題名のみを記し、800-1200字(参考文献は別)にまとめ、電子メール添付ファイルで送付。電子メール本文に氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールアドレス明記。

※審査の際、応募者が特定されないよう、事務局が応募書類を加工させていただくことがございます。

【応募締め切り】2013年6月30日(日)必着

【採否決定】2013年7月末(予定)

【問合せ】〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8 大阪大学大学院言語文化研究科

田畑智司研究室気付

英語コーパス学会事務局

e-mail: jaecs.hq@gmail.com

新入会員紹介 (11月27日現在 Sは学生会員)

安間 一雄	獨協大学
石井 昌子	京都大学大学院 S
今尾 康裕	大阪大学
上田 倫史	駒澤大学
岡本 芳和	金沢星稜大学
奥西 嘉一	関西大学大学院 S
菊地 翔太	東京大学大学院 S
小屋 多恵子	法政大学
坂本 泰伸	東北学院大学
椎名 美智	法政大学
島田 祥吾	広島大学大学院 S
高山 春花	東京大学 S
竹下 裕俊	尚絅大学
辻 建一	金沢星稜大学女子短期大学部
深谷 修代	津田塾大学
藤枝 美穂	京都医療科学大学
藤野 玄大	東北学院大学大学院 S
若松 弘子	筑波大学 S

【賛助会員】

株式会社 ひつじ書房

会誌『英語コーパス研究』第 21 号論文投稿募集について

『英語コーパス研究』第 20 号 (2013 年刊行) について報告いたします。2012 年 9 月末に締め切りの、本年の会誌への投稿数は、研究論文 4 点、特別寄稿 1 点でした。現在、編集委員および論文査読委員による厳正な査読審査が行われております。『英語コーパス研究』は例年 9 月末日が投稿の締め切りです。本年度投稿に至らなかった論文等をお持ちの会員の方々は、来年度の投稿へ向けて是非ともご検討をお願いいたします。研究論文、研究ノートのみならず、書評やコーパス紹介、ソフトウェアレビュー、実践報告なども受け付けております。学術的水準も高く、かつ多くの会員諸氏にとって有益な情報をもたらす会誌としたいと願っております。多くの投稿をお待ちしております。

続きまして、『英語コーパス研究』第 21 号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフトウェア紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締め切り】2013 年 7 月 31 日 (水)

氏名、所属、原稿の種類とタイトル、連絡先住所を下記の原稿提出先まで電子メールにてお知らせください。メール件名は『『英語コーパス研究』第 21 号投稿申込』とし、メール本体に上記の情報を箇条書きで記入ください。

【原稿提出締め切り】2013 年 9 月 30 日 (月)

電子メール添付にて提出してください。提出方法等についての詳細は学会 Web ページの投稿規定

http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/Guidelines/ECS_SGuide-j.pdf を参照してください。

※なお、本文や図表の体裁および参考文献目録の表記の統一などに関して第 19 号を参照の上、十分にご配慮ください。

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
東北大学・大学院国際文化研究科 岡田毅

TEL: 022-795-7632 FAX: 022-795-7632

e-mail: t-okada@intcul.tohoku.ac.jp

【原稿の長さ】(厳守ください)

1. 研究論文

和文：A4 サイズ 1 ページあたり 35 字×30 行、17 枚以内 (10.5 ポイント (MS 明朝) 使用)

英文：A4 サイズ 1 ページあたり 70 ストローク×35 行、17 枚以内 (10.5 ポイント (Times New Roman) 使用)

※いずれも Abstract (英文)、図表、注、参考文献目録、付録を含む

2. 研究ノート

研究論文の書式と同様で、12 枚以内

※いずれも Abstract (英文)、図表、注、参考文献目録、付録を含む

3. その他

研究論文の半分以下

【書式】

第 19 号所収の論文を参考にしてください。詳細は上記の学会 Web ページで確認ください。

【採用通知】2013 年 11 月下旬

【刊行予定】2014 年 5 月下旬

※なお、投稿申込 (7 月末締切) への応募の有無に関わらず、9 月末の原稿締め切りまでに投稿頂ければ、会誌への投稿は可能です。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
岡田毅 (東北大学)

東支部活動予定

東支部では、以下の通り、来年 3 月上旬に講習会・研究発表会を行うよう企画しました。

下記の要領で研究発表を募集いたします。また、講習会については、1 月中旬より受付を開始します。多くの会員の応募、参加をお待ちしています。

JAECS 東支部 講習会・研究発表会

【日時】2013 年 3 月 9 日 (土) 10:30~17:00

【場所】成城大学 (東京都世田谷区)

<http://www.seijo.ac.jp/>

【内容】10:30~12:00 [801 教室 (CALL 教室)] 講習会：BNC_{web} 入門 (仮称) (定員 45 名) 先着順 後日受付開始)

13:00～17:00 (終了は予定) [312 教室] 研究発表
【参加費】 会員無料・非会員 1,000 円

研究発表につきましては、以下の要領で発表を募集します。

【分野】 本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。

【応募資格】 本学会員であること。

【発表方法】 発表 25 分、質疑 15 分。

【応募方法】 冒頭に題名のみを記し、発表概要を 800-1200 字 (参考文献は別) にまとめ、メール添付ファイルで送付。メール本文に氏名 (ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、メールアドレス明記。メールタイトルに「JAECS 東支部研究発表申し込み」と明記。

【応募締め切り】 2013 年 1 月 31 日 (木) 必着

【採否決定】 2013 年 2 月中旬 (予定)

【問合せ・申し込み】 JAECS 東支部 塚本聡
(jaecs.eastern@gmail.com)

講習会につきましては、後日 (1 月中旬)、概要をお知らせしたのち、受け付け (先着順) をいたします。

研究発表プログラム等については、申し込み締め切り後、詳細をお知らせします。

東支部長
塚本聡 (日本大学)

理事会の決定事項について

9 月 28 日 (金) 17 時より大阪大学豊中キャンパスで開かれた理事会におきまして、以下の議案が審議の結果決定しました。

■ 人事について

(1) 顧問の推挙について

2013 年度より、学会長を 2 期務めていただいた中村純作先生を顧問に推挙することが提案され、審議の結果、承認されました。中村先生、今後とも当学会発展のためにご指導いただきますようお願いいたします。

(2) 顧問の辞退について

今井光規先生ご自身より、2012 度末で顧問を辞退したいとのご要望が出されておりました。審議の結果、本件は承認されました。今井先生には当学会の設立時より長きにわたり、多大なご尽力をいただきました。有り難うございました。そしてお疲れ様でした。

(3) 名誉会員について

第 38 回大会の記念講演で講師をお務めいただいた英国 Liverpool 大学 Michael Hoey 先生に名誉会員となつていただくことが提案され、審議の結果、承認されました。

■ 今後の理事会の運営について

(1) 理事会定足数について

現在、理事会の定足数についての規定がないため、今後は定足数を全理事の 3 分の 2 以上とすることが提案され、審議の上、承認されました。

(2) 春季理事会の開催について

春季理事会は今後も開催すること、出席のための旅費は支給しないこと、春季理事会はワークショップや講演会と同日に行うことが提案され、審議の後、承認されました。

■ 『英語コーパス研究』の装丁変更について

機関誌『英語コーパス研究』編集委員会より、第 21 号から装丁デザインの変更を行うことが提案され、審議の結果、承認されました。詳細については、編集委員会で検討することとなりました。

■ 英語コーパス学会東支部の規約について

塚本東支部長の代理として投野副会長より規約案の説明があり、審議の上承認されました。東支部規約は次のとおりです。

【英語コーパス学会東支部 規約】

本支部規約は、英語コーパス学会 (以下「学会」という) の会則第 16 条に基づき、支部の名称、目的、活動、組織、その他運営に必要な事柄を定めるものである。

(名称)

第 1 条 本支部は「英語コーパス学会東支部」 (Eastern Chapter of the Japan Association for English Corpus Studies) と称する。

(目的)

第 2 条 本支部は、英語コーパスおよび関連分野の研究や教育を促進し、東日本地域の学会員相互の交流を深めることを目的とする。

(活動)

第 3 条 本支部は、次の活動を行う。

(1) 講演会、シンポジウム、研究談話会、ワークショップ、読書会などの研究会。

(2) 学会ニューズレターによる活動の紹介、情報提供。

(3) 支部ホームページの運営。

(4) その他、支部の目的達成に必要な活動。

(会員)

第4条 第2条に定める地域の学会員を以て支部会員とする。

(役員)

第5条 本支部には次の役員を置く。

(1) 支部長 1名。

(2) 運営委員 若干名。

2 支部長は、運営委員の互選による。

3 支部長は、運営委員と合議の上、支部の活動計画を立て、実施する。

4 運営委員は、支部会員の中から理事会の議を経て会長が委嘱する。

(役員任期)

第6条 支部長・運営委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

2 年度の途中で支部長・運営委員の委嘱を受けた者の任期は、前任の残任期間とする。

(報告)

第7条 支部長は、支部の年間活動内容について、理事会に報告しなければならない。

(会計)

第8条 支部の維持費は理事会で定められた年間活動予算を以て充てる。

2 会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

3 会計管理は支部長が行い、翌年度最初の理事会に会計報告を行う。

(規約の変更)

第9条 本規約を改正・変更する必要があるときはその都度理事会で協議の上、実施することができる。

(附則)

本規約は、平成24年4月1日より実施する。

以上

■今後の大会日程と開催校

(1) 第39回大会は平成25年10月5～6日に東北大学大学において開催されることが決まりました。

(2) 第40回大会は平成26年10月(予定)に熊本学園大学にて行われることになりました。当学会初めての九州での開催となります。

◇ 寄贈刊行物の紹介

以下の図書の寄贈がありました。心より御礼申し上げます。

- ・ 石田基広・金明哲 編 (2012) 『コーパスとテキストマイニング』 共立出版. [石田基広氏・金明哲氏より]
- ・ 井上永幸・赤野一郎 編 (2012) 『ウィズダム英和辞典第3版』 三省堂. [井上永幸氏・赤野一郎氏より]
- ・ 大名力 (2012) 『言語研究のための正規表現によるコーパス検索』 ひつじ書房. [大名力氏より]
- ・ 衣笠忠司 (2012) 『マンガ対訳本から学ぶ 日英対照 英語表現研究』 開拓社. [衣笠忠司氏より]
- ・ 高田博行・椎名美智・小野寺典子 編 (2011) 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』 大修館. [椎名美智氏より]
- ・ 堀正広 編 (2012) 『これからのコロケーション研究』 ひつじ書房. (会員の執筆者: 堀正広, 小屋多恵子, 赤野一郎, 田畑智司, 大名力) [堀正広氏より]

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

FORUM

◆ 新刊紹介

赤野一郎 (京都外国語大学)

i_akano@kufs.ac.jp

塚本倫久著『プログレッシブ 英語コロケーション辞典』小学館。四六判，578頁。2,520円(税込)。ISBNコード: 9784095110097

英和、英英を問わず学習英語辞典の記載内容は、語義解説、語の選択制限、使用域・スピーチレベル、文型、用例、語法、語源など多岐にわたる。コロケーションもその1つであるが、汎用的な学習辞典ではどうしてもその記述は、量・質とも不十分になる。そこで必要とされるのがコロケーション専門の辞典である。

周知の通り、我が国には勝俣銓吉郎の『英和活用大辞典』(研究社, 1939, 1958)が元となる改訂増補版、市川繁治郎編



『新編英和活用大辞典』(研究社, 1995)がある。38万例という豊富な用例を誇るコロケーション辞典だが、例文は日本語訳を添えて共起語のアルファベット順に配列されているだけで、いずれのコロケーションを選択するかは、学習者の判断に全面的に委ねられているため、その使用は上級者に限られる。

一方海外では、*Oxford Collocations Dictionary for Students of English* (OUP, 2002, 2009), *Macmillan Collocations Dictionary* (Macmillan, 2010)など、コーパス言語学の研究成果を踏まえた、使いやすいコロケーション辞典が出版されている。ここで紹介する本辞典は、我が国で初めてコーパスに基づき編纂された、中級学習者向けの本格的なコロケーション辞典である。

検定教科書の語彙選定基準、JACET 8000, BNCの高頻度語をもとに日本人英語学習者を念頭に2,500語の見出し語が選定され、それぞれの見出し語のコロケーションはBNCの頻度情報などに基づき提示されている。形容詞に対する副詞(e.g. *significantly* DIFFERENT), 動詞に対する副詞(e.g. *cordially* INVITE), 名詞に対する動詞および形容詞(e.g. *sign* a CONTRACT, a *long-term* CONTRACT)の語彙的コロケーションと、*be afraid of A*, *apply A to B*, *the fact that* など、形容詞、名詞、動詞と前置詞や不定詞・動名詞・節からなる文法的コロケーションを示している。

用例に関しては、著者の同僚のJohn Blundell氏による綿密な英文校閲を経た「実際の場面を彷彿とさせる」もの(e.g. *His story was significantly different from the truth./We signing a contract.*)が添えられている。日常の話し言葉で頻繁に使われる固定表現(e.g. *I can only guess.../Guess what!/let me guess/You can guess, etc.*)を提示するPHARSES欄を適宜設け、実用性を高めている。

これだけの内容の辞典を1人で作り上げた情熱と努力に敬意を表したい。またコロケーション辞典の存在を知らない、ましてや使ったことのない学習者が多い中で、本辞典が出版されたことはたいへん意義深いことである。

◆ 「計量的言語研究の諸相」開催報告

高見敏子 (北海道大学)

takami@imc.hokudai.ac.jp

2012年9月19日(水)に北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院にて、JAECS会員の4人の先生方を含む5人の先生に札幌までお越しいただき、「計量的言語研究の諸相」と題した研究発表会・連続講演会を開催しましたので、

この場をお借りしてその模様を報告させていただきます。

当日の午前中は開催部局所属のJAECS会員2名が研究発表を行いました。園田勝英氏の「The NICT-JLE Corpusの新たな分析の試み」と題した最初の発表(大学院生・白土淳子氏との共同研究)では、1,281人の日本人英語学習者に対する「英会話能力試験(SST)」を書き起こしたNICT-JLE Corpusを用いて、日本人の英会話能力の発達プロセスを解明するためにはどのような分析を行うべきかについての考察がなされ、特に、1,281人のそれぞれについて産出量・ポーズや繰返しの頻度・語彙使用の特徴・談話標識の種類など多くの特性を抽出し、その結果を統計的に分析するための研究計画が示されました。続いて筆者が「機能語の語彙頻度から探るイギリスの高級紙と大衆紙の違い」と題してBank of English(2001年時点)の品詞タグ付き語彙頻度の対数尤度比から特定した高級紙に多い機能語・大衆紙に多い機能語のうち、冠詞・前置詞*of*・代名詞全般に関して判明したいいくつかの特徴について発表しました。

午後は他大学・研究機関からおいでいただいた5人の先生方による講演会を行いました。お一人目の石川慎一郎氏(神戸大学)には「アジア圏英語学習者国際コーパスネットワークICNALEを用いた域内学習者別言語使用傾向の抽出とその教育的応用: “I think”の多用は日本人学習者の特徴である…のか?」と題して、これまでの学習者英語コーパス研究の流れを精査して綿密に計画されたICNALEの構築と、同コーパスから得られたアジア圏の英語学習者との比較による日本人英語学習者の特徴について御講演いただきました。多国的な英語学習者コーパスを構築することによって初めて、単なる母語話者との比較では十分に判別できない日本語母語話者の特徴が明らかになるというもっともな御主旨で、学習者コーパス研究の精緻化の1つの方向性が示された御講演でした。

お二人目の前田忠彦氏(統計数理研究所)には「社会言語学的な調査の設計と実践～第4回鶴岡市における言語調査を例として～」(国立国語研究所の阿部貴人氏・米田正人氏との共同研究)と題して、統計数理研究所と国立国語研究所が1950年から共同で行っている共通語化に関する調査の概要と、2011年に行われたその第4次調査の最新結果について御発表いただきました。このプロジェクトは約20年毎に行われて来た国内最長となる言語調査で、調査結果そのものも大変興味深いものでしたが、時代の変化に伴う調査設計の変更・同じ個人を対象とした61年にわたる調査結果・時代効

果や年齢効果を考慮した分析など、短期の言語調査にはみられない特徴が強く印象に残りました。

続いて小山由紀江氏（名古屋工業大学）には「コーパスと ESP—科学技術英語のテキスト分析諸相—」と題して、ESP 研究という分野で 2006 年から続けて来られた御自身の科学技術コーパスに関するさまざまなプロジェクトのこれまでの進展について御発表いただきました。現在取り組んでおられる科学技術英作文支援ツールと同ツールを使用したタスク実験の結果を拝見して、日本人の英作文能力を向上させる方法に常々関心を抱いていることもあり、コーパス研究の知見が今後一般ユーザー向けのツールの開発に活かされていく可能性への期待が大きく膨らみました。

短い休憩をはさんで、田畑智司氏（大阪大学）が「Key words and textometry: Are key words really “key” words?」と題して、語彙頻度の群内分散が大きい場合や、特定のテキストに分布が偏っている場合に、複数のテキストを 1 つの集団として log-likelihood ratio を用いて特徴語を抽出する方法の問題点を指摘されるとともに、その解決策として Jeffrey Lijffijt 氏らが今年 5 月の ICAME 第 33 回大会で提案した bootstrap test と、御自身のデータでの実際の適用例を示されました。例えば WordSmith に検索語のテキスト中の分布位置を示す機能がありますが、従来こうした分布特性に関しては語彙頻度の分析時にさほど考慮されてこなかったことは事実です。Log-likelihood ratio を使って特徴語の特定を行って来た筆者には特に直接的な興味のある御講演で非常に勉強になりました。

講演会の最後を締め括っていただいたのは石川有香氏（名古屋工業大学）による「話し手要因とテキストの言語特徴の関係」と題した御講演で、話し手・聞き手の性や年齢、社会階級等といった情報を分析に活用することの重要性を指摘され、SST の謝辞表現の分布を例に、話し手・聞き手の性や使用地域、年齢、そして習熟度と使用頻度の関係を示されました。こうした話し言葉研究の必要性・重要性は極めて高い一方で、話し言葉コーパスの構築は容易ではないため特定表現を調査するのに十分なコーパスサイズがなかなか得られないという状況にあります。近い将来、音声認識技術の発達等により話し言葉コーパスも飛躍的に発展し、こうした分野の研究がますます進展することを願いたいものです。

以上、各御講演の内容を簡単に御報告させていただきましたが、本学会でも御活躍の先生方とフロアとの質疑応答や情報交換もあり、おかげさまで計量的な言語研究のさまざまな側面を一日で概

観できる大変充実した講演会となりました。

当日朝は生憎の雨模様でしたが、地元だけでなく、東京や関西からもたくさんの御参加をいただき、中には九州からおいでくださった方もおられました。御講演くださった先生方、そして全国各地からおいでくださった皆様にこの場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。

◆「ランカスター大学名誉教授 Geoffrey Leech 博士公開講演会」報告

鳥飼慎一郎（立教大学）

tori@rikkyo.ac.jp

去る 10 月 8 日、9 日、10 日、11 日に立教大学池袋キャンパスにおいて、立教大学招聘研究員として来日中のランカスター大学名誉教授の Geoffrey Leech 博士を講師にお招きして、4 日連続で公開講演会を開催した。講演のテーマは 20 世紀初期のイギリスにおける英文法研究の紹介から始まり、その後のアメリカにおけるコーパス言語学の勃興と衰退、イギリスにおける戦後のコーパスを使った英文法研究の開始と現在に至るまでの発展とその成果に及んだ。リーチ博士自身がロンドン大学のクワーク博士のもとで初期の段階からコーパスを使った文法研究に携わり、その後は世界初の汎用コーパスである BNC を構築し、それを基に現在の英語の様々な文法的諸相を研究し続けてきた第一人者だけに、その議論はきわめて説得的であり、まさに戦後のイギリスの英文法研究の歴史を見る思いであった。

第 1 回目の公開講演会では、リーチ博士がこれまで携わった 3 つの文法書を含む主要な文法書の刊行とコーパスとのかかわり方が当時の写真などを交えて紹介された。文法書編集にあたっては、コーパスを基にした data orientation な考え方、その反対にある theory orientation な考え方、その中間にある descriptive orientation な考え方があることが解説された。また、コーパスの使用方法については、コーパスを著者の言語的直観をチェックするものとして使う corpus-informed な使い方と、コーパスそのものに基づく corpus-based な使い方があるが、informant test を使用したデータ収集法もあることが紹介された。最後に、*Longman Grammar of Spoken and Written English* を例にとり、コーパスにおける頻度の重要性とその利用方法等について言及がなされた。

第 2 回目の公開講演会では、世界トップクラスの汎用コーパスである BNC の成功事項：

It has been claimed that the BNC is the most widely

used corpus in the world.

It was the first text corpus of its size to be made widely available.

It is available from a wide range of different sources:

It is widely regarded as a 'standard reference corpus' for the English language.

It has been licensed to over 1300 institutions throughout the world, over 1800 users have signed on for access to it through the BNC_{web} online interface, etc.

ならびに失敗事項：

It never reached 100 million words! (98,300,000)

The design criteria were never totally achieved.

It hardly ever contains complete texts.

The spoken materials are poorly transcribed.

The metadata are incomplete and can be erroneous.

The part-of-speech tagging contains many errors.

It is out of date! (dating from the late 20th century)

の両方についてまず説明があった。そのあとで、BNC を構成する言語データ、BNC を構築するにあたって5つの段階 (designing the corpus, preliminary task, inputting and making up the text, annotating the corpus, making the corpus available for users) についての説明があり、BNC 完成後のさらなる展開、正規表現の活用法とその限界に至るまで詳細な説明があった。最後に、コーパスを使った研究の限界について言及されたが、リーチ博士自身がBNC等のコーパス構築、及びそれを使った研究の当事者であるため極めて説得力のある議論が展開された。

第3回目の公開講演会では、20世紀の100年間におけるイギリス英語とアメリカ英語の歴史的変遷についてはブラウン・コーパスを基軸とし、およそ30年ごとに両英語のコーパスが構築され、検証が重ねられてきたことが紹介された。その研究成果を基に、特に動詞句の変遷に焦点を当て、具体的な論証がなされた。例として取り上げられたのは、not contractions の増加、modals の減少と semi-modals の増加、*must* の減少と *have to* の増加、modal としての *need* の大幅な減少と *need to* のそれに代わる大幅な増加、本動詞としての *hadn't* の大幅な減少と *didn't have* の大幅な増加、イギリス英語における現在進行形の増加とイギリス、アメリカ英語における *be passive* の減少等について極めて実証的な説明がなされ、変わりゆく英語の諸相が視覚的によく理解できた講演であった。

第4回目の公開講演会では、これまでの英語の歴史的変遷の研究成果を基に、英語は今後 grammaticalization, colloquialization, americanization, democratization の4つの方向性を持って変化してゆくであろうということをコーパスデータを基に具体的に論証した。さらに、英語には同一性を目指す求心力と、多様性を目指す遠心力とが働き、ダイナミックな変化が起こるであろうと予測した。さらに、Kachru の concentric circle model (inner circle, outer circle, expanding circle) が、今では the lampshade model (world standard English, national & regional standards and standardizing varieties, more localized varieties) へと変わりつつあることを指摘した。更に、英語を第2言語として学んだ人々が使う簡略された EFL (English as a lingua franca) も紹介され、3単現の-sがない、冠詞がない、付加疑問文はすべて *isn't it*, などという点に親近感を持った意見がフロアーから出された。

つごう4回の公開講演会には、全国からリーチ博士の旧知の友人、ランカスター大学の教え子、英文法学者、英語教育の研究者、将来の日本の英文法研究や英語教育を担う若手の大学の教員及び大学院生が数多く集まった。現在の英文法研究の最先端で研究を続けているリーチ博士の研究姿勢に全員が大いに触発された様子で、会場に残って熱心に質問をする大学院生や学部生の列ができたが、その質問に丁寧に答えるリーチ博士の真摯なお人柄に多くの参加者が感銘を受けた。